

No.18 坂口 寛敏 「バーコード・ブリッジ」

Hirotooshi Sakaguchi

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 6月15日付 立川市市報記事より

ファーレ立川では、人間の化身である様々な美術を新しい街のなかに埋め込もうとした。それによって新しい街に人間が生き、都市のヒダができるようになるだろう。

坂口寛敏は、平面でも、自然のなかでのインスタレーションでも美しい作品をつくるのだが、ここでは他の人がやり残した新しい可能性を考えようとした。人間の影を舗道に映し込むことも一案であったが、最終的にはバーコードをペDESTリアンデッキにつくることにした。

何気ないデザインが実はこの社会を動かしているバーコードだと知った時の楽しさもまた、美術のもつ働きのひとつだと思う。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

買い物をするとレジでバーコードを読み取られ、値段が集計されて出てきます。

黒い巾の異なった縦縞が帯状になったバーコードの図をペDESTリアンデッキ内のブリッジ路面にタイル張りで表わしました。

バーコードは、物品の管理や価格計算のためには大変便利なものらしく世界的に使われているものです。毎日の通勤、通学や買い物で通るこのバーコードブリッジを、最初拡大されたバーコードの図であることはほとんどの人は気付かないだろうし、 そうだとわかっても、それ以上のことは考えないでしょう。

私達の足の裏は、これを読み取る機能を持っていないので、このブリッジのお値段を通過して即座に知ることは勿論できません。しかしながら各々が自分自身の速度でくり返し通るうちに各々の足の裏は様々なことを読み取り、それによって思考を巡らすようになるかもしれません。バーコードの図のコントラストを体で感じながら歩いていると、ふと体が空中に浮いている様な感覚を覚えるかもしれません。実際に、人は地上から上方に離れた場所を歩いているのです。このブリッジを渡ることをある日ふと考え始めるとしたら、そのための橋渡しに、あるいはヒントになればと考えています。

しかしそんなことも考えることが面倒な人は、一休さんのようにバーコードのない端を通るでしょう。そして子供達だったらどのような渡り方を考え出すのか、上方よりそっとのぞいて見たいものです。